

書評

Anthony Reid. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680. Volume Two: Expansion and Crisis.* New Haven and London: Yale University Press, 1993, xv+390p.

本書は、『交易の時代における東南アジア 1450-1680』全2巻のうちの第2巻である。第1巻(1988)は、東南アジアの物質文明(生活)を「長期持続の歴史」(ロング・デュレ)として描いたのに対して、第2巻は同時代の中期的(コンジョクチュール)および短期的(エベヌマン)変化を扱っている。こうしたアナール派の枠組みを前提として、著者はこの時代の「全体史」を描こうとしているのである。まず、本書の構成を示しておこう。

- 第1章 交易の時代 1400-1650
- 第2章 都市とその交易
- 第3章 宗教革命
- 第4章 絶対主義国家の諸問題
- 第5章 東南アジアの貧困の起源

著者には当初から全2巻の構想があったはずであるが、第1巻の出版から第2巻の出版まで5年間かかっている。著者はこの遅れについて特別に理由を示していない。しかし第2巻では、著者のこれまでの著作と比べて、大陸部東南アジア、さらに中国人の活動や南シナ海交易に関する記述が大幅に増えている。おそらく、この分野の研究のために予想外の時間がかかってしまったのであろう。

評者はすでに第1巻について本誌で書評をおこなっているし、<sup>1)</sup> 方法論的な問題についても別の個所ですでに検討している。<sup>2)</sup> そこで、ここではまず第2巻の要点を簡単に示し、次に、第1巻と2巻を含めた総合的な検討をおこなうことにしたい。

- 1) 『東南アジア研究』第27巻1号, pp. 128-129. 1989.
- 2) 大木 昌「東南アジア——一つの世界システム」石井米雄編『東南アジアの歴史』(講座 東南アジア学4), pp. 145-170, 弘文堂, 1991.

さて、第2巻のテーマである、交易の時代における変化とは、副題にあるように「拡大と危機」である。ここで「拡大」とは量的な側面だけでなく、制度的、社会的な革新(innovations)をも含む。第1章から第4章までが交易の時代の「拡大」局面であり、第5章が「危機」あるいは衰退の側面である。

第1章は交易の時代の発端(1405年、最初の鄭和の遠征)からブーム期(1570-1630年)を経て1680年代までの交易の拡大を、統計を含むデータによって実証的に記述している。続く第2章は、交易の拡大を背景として、東南アジアの各地に成長した都市(とりわけ海および河川の港市)の成長である。これは同時に、東南アジア社会に、市場の発展、貨幣の流通と全般的な商業化、商業エリートの出現、都市化、人種的多様性などをもたらした。

第3章は宗教改革である。交易の時代には新しい宗教(イスラム教およびキリスト教)が普及した。また、すでに大陸部東南アジアに定着していた宗教(上座部仏教、儒教)においても、国家イデオロギーとして組み込まれたり、王のコントロールのもとに宗教勢力が世俗勢力化するなどの変化が生じた。

上記の4つの外来宗教は、それぞれ成文化された聖典に基づき、発祥地の地域的特殊性を超えた「普遍性」をもっていた。王やスルタンなどの新しい権力者は、こうした外部の普遍性を正当性の根拠とし、地域的な精霊信仰やシャーマニズム、伝統的権威を抑えていった。これが、第4章の、絶対主義国家のひとつの重要な基盤になった。

第4章は交易の時代に出現した絶対主義国家の問題である。アンコール、バガン、シュリビジャヤなどの古典的国家(classic states)は1300年頃までに衰退し、交易の時代には港市国家が出現した。交易によって権力者は富と、それを使って銃や大砲などの兵器を手に入れた。そして、これがさらに権力者の交易独占と権力の集中を促進した。政治的には、外部の宗教的普遍性を武器に、ライバルである古い伝統的権力や裕福な商人たちを排除し、ある程度の官僚機構を発展させた。これらの意味で著者は、交易の時代に出現した国家を絶対主義国家と呼んでいるのである。

第5章は、交易の時代の衰退から終焉までの東南

アジアである。まず、交易の時代を支えた日本とメキシコからの銀の流入が1630年代中葉を境に急激に減少した。一方、ヨーロッパでは17世紀中葉に気候の不順、戦争、疫病などが蔓延した「全般的危機」をむかえ、東南アジアの産物に対する需要が減少した。

さらにヨーロッパ人勢力との軍事衝突で、東南アジア勢力は次第に敗退した。著者は、島嶼部のなかで最大の勢力であったアチェとマタラムがオランダとの戦争に破れた1629年を転換点としている。これらの要因があいまって、東南アジアは世界の交易から撤退することを余儀なくされた。これは同時に絶対主義国家、都市化傾向、商業主義などの衰退をもたらし、住民は貧困に逆戻りしてしまった。これら全ての状況を、著者は東南アジアの危機と呼んでいる。

以上が各章の概要である。著者もことわっているように、本書で描かれた変化はあくまでも全体的傾向であり、部分的にはこの傾向とは異なる出来事も当然ある(p.327)。この点を念頭において、以下に若干の問題を検討しよう。

まず、第1巻と第2巻とを合わせた全体的な問題である。著者は第2巻の冒頭で、「この巻は、交易の時代という一つの時代が、東南アジアにとって何を意味したのかについての説明として、独自に読むこともできる」(xiii)と述べている。それでは、本書を全2巻とした意味はないのだろうか。

第1巻の主要な事項が一般民衆の日常生活であったとすれば、第2巻のそれは海外交易、戦争外交、王、都市、国家、商人、外国人、宗教指導者など、いわば表舞台の出来事である。従来の東南アジア史研究は、この時代の一般民衆がどのような生活をしてきたのかについてほとんど関心を払ってこなかった。これに対して本書は2巻を通じて、世界的規模で、または東南アジア的規模で生じていた出来事と、一般民衆の生活とがどのようにかかわっていたのかを、立体的に理解できるよう構成されている。このような著作はほとんど類例がなく、東南アジア史研究におけるパイオニア的作品であるといえよう。

ただし、上記二つのレベルの出来事を有機的に関連づけて理解するには多少の想像力を必要とする。イスラム教の受容がもたらした影響という問題を例

に、これを説明しよう。第2巻では、イスラム教と絶対主義国家の出現との関係やイスラム諸国家間の軍事的同盟などが述べられている。他方第1巻では、この時、民衆レベルではアラビア語習得の機会が男子の宗教学校に限定されるようになったことが述べられている。かつて文字文化の面で男女は平等であったが、イスラム教の浸透により男性優位へと変わっていったのである。また、「普遍性」をもつ宗教は国家の形成に重要な役割を果たしたが、それは圧倒的に男性優位の原理を持っていた。このため、それまで女性が伝統的に保持していた地位や役割の相対的な低下をもたらした。このような対応関係を考えながら第2巻を読めば、全体として交易の時代が東南アジア社会にとって何を意味したかが、従来の歴史記述とは別な観点から理解できるであろう。

本書のもうひとつの魅力は、全2巻の本文だけで650ページ以上にも及ぶ大著で、かつ、これだけ多様な問題を扱っていながら、それらがバラバラにならず、全てが「交易の時代」という一点に収斂していることである。これはもちろん、本書が一人の著者のアイディアによって貫かれているからである。著者は同じ年に、同様のテーマで10人の研究者によって書かれた本を編集しているが、<sup>3)</sup>これは結局は論文集であり、さまざまな断面は明らかになるが、読者がひとつの統一的世界像を結ぶことは不可能である。

それぞれの分野の専門家の手になる論文集はそれなりにメリットをもつ。しかし、歴史研究の魅力の一つは、ある時代と地域に関するまとまりのある世界を提示することにある。この意味で、この全2巻は非常に魅力的な作品である。もちろんこの場合、単独個人では使用できる言語(資料の限界)や専門知識の限界もあるが、それを差し引いても単著のメリットの方が大きいと思う。

ところで、本書は1450年から1680年までの東南アジアを「交易の時代」として時代区分している。東南アジア全体を含む時代区分としては、従来このような時代区分はなく、これは明らかに著者のオリ

3) Anthony Reid (ed). *Southeast Asia in the Early Modern Era, Trade, Power, and Belief*. Ithaca and London: Cornell University, 1993.

ジナルな歴史認識である。個々の具体的事実の発掘も興味深い、新たな歴史認識を提示していることはそれに劣らず重要であろう。伝統的な、古代（初期）、中世、近世、近代といった時代区分は便利ではあるが、必ずしもその中身を明らかにしてはくれない。この意味で本書の時代区分は卓抜な構想であると思う。

それでは、この時期の時代区分は「交易の時代」だけが唯一なのだろうか。たとえば、本書の著者と同様の問題意識に基づいて「インド洋世界」を描いたチョードリー（K. N. Chaudhuri）氏は、イスラムの勃興からヨーロッパによる支配（1750年）を時代区分としている。<sup>4)</sup>あるいは、人間の生活と自然との関わりや文化史の観点から時代を区分することも原理的には可能である。この他にも時代を区切る多様な視点があり得るだろう。それでも、「交易の時代」という視点は、当時の東南アジア世界の多くの出来事を中心に説得的に説明していると思う。

評者自身、ジャワ史に関して、ヒンドゥー期、イスラム期、植民地期などの従来からの時代区分を安易に受け入れてきたが、本書は、これらの妥当性や内容を再検討するの必要を感じさせる。本書の時代区分に賛成であれ反対であれ、本書は時代区分に関して問題提起をしていることは間違いない。

第2巻に関して検討すべき問題は多数あるが、ここでそれら全てを議論することはできないので、以下の3点に限定してコメントしてみたい。第1点は、東南アジアをひとつのまとまった世界として見ようとする著者のねらいがどの程度成功しているか、という問題である。交易の盛衰、都市の発展、宗教の伝播、集権国家の出現などが、個々ばらばらに起こったのではなく、世界の動きと連動しつつ東南アジア的規模で起こっていたことが十分説得的に描かれており、著者の意図は成功していると思う。従来の研究では、これらの出来事は地方史ないしは各国史の枠内だけで理解されてきたが、本書のアプローチによれば、個々の出来事の意味が世界史的ないしは東南アジア史的な文脈の中で一層明確になる。

4) K. N. Chaudhuri. *Asia before Europe: Economy and Civilization of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.

第2点は、「絶対主義国家」という概念についてである。著者は第4章のタイトルにこの言葉を用いている。元来これは西洋史から出てきた概念であり、それは封建制から資本主義への移行過程で出現した国家形態のひとつである。著者によれば、交易の時代の強力な支配者たちは、超自然的地位を持ち、住民の土地、財産、生命を処分する権限をもっており、名実ともに絶対的な存在であった。しかし著者は、東南アジアの絶対主義とヨーロッパのそれとは異なっていることも認めている（p. 262）。しかも、「（東南アジアの）絶対主義はその下地として、封建制や立憲君主制を扱うのではなく、独立した親族集団、部族、国家に組み込まれていない企業家たちを扱わなければならない」とも述べている（p. 251）。

評者は、当時の集権国家を絶対主義国家と呼ぶことには多少疑問を感じる。しかし著者は、こうした批判を承知の上で、これまで東南アジア史ではほとんど使われてこなかった絶対主義国家という言葉に敢えて用いているのである。この背後には、東南アジア史とその他の地域の歴史とを同じ土俵で議論しようとする著者の意図と問題提起があったからだと思う。

著者自身は明言していないが、絶対主義もヨーロッパ型だけでなく、「東南アジア型」も考えられる、ということであろう。東南アジア史研究は、絶対主義だけでなく封建制や立憲君主制、資本主義などの概念についてもいずれ議論する必要が生ずるであろう。この意味で、著者の問題提起は一考に値する。

第3点は、交易の衰退期を「貧困の起源」と位置づけている問題である。著者によれば、東南アジアは海上交易の重要さがヨーロッパなどよりはるかに大きいので、この衰退はその後ずっと貧困をもたらすことになった。巨視的にはこのような認識は誤ってはいないが、もう少し具体的な面で行くつかの疑問もある。

著者は、東南アジアの貧困化を、輸入の減少、特にインドから織物製品の輸入量が減少したことを根拠としている。確かに、交易の最盛期と比べれば17世紀末に向かって輸入量は減少した。しかし、それでも交易の時代が始まる以前の水準に比べればまだ多いであろう。また、交易の時代以前の東南ア

## 書 評

ジアが貧困であったと断定することはできない。

さらに、著者は、交易の時代が一体誰に富をもたらしたのかも厳密には述べていない。全体の文脈からすれば、支配者はその利益を独占しようとしていたが、輸出品の生産者（農民）も当然交易の利益を得ていたはずである、という議論になる。しかし、本書は農民の生活水準や農業生産については触れていないので、この点も検証されているわけではない。交易の衰退は王侯貴族にとっては明らかに貧困の起源になったかもしれないが、一般農民にとっても同じであったかどうかは検証されるべき問題である。

著者が「東南アジアの危機」と呼ぶ17世紀後半をどのように評価するかは興味深い問題である。貧困の起源とする評価の他に、東南アジアという「一つの世界システム」の分解期、植民地化への序曲とも考えられるし、内向き (inward-looking) になっ

た東南アジアに独自の文化様式が発展する発端であったかもしれない。これも今後の課題のひとつである。

最後に、評者が個人的に関心をもった問題を1点だけ述べておきたい。著者は、新しい宗教（ここではイスラム教とキリスト教）に改宗する魅力のひとつとして、新たな医療への住民の期待を指摘している (pp. 155-157)。というのも、人々にとって重要な関心事は当時も今も病と死であり、宗教に対して、これらに対する不安を除いてくれることを期待するのはごく自然だからである。おそらく、ヒンドゥー教、仏教の伝播の際にも、宗教理念と同時に、医療などの実利的な期待があったのであろう。評者は、病と癒しの歴史は民衆レベルの歴史を解く有効なカギになると考えている。

(大木 昌・八千代国際大学)